

隅田川

結崎十郎作

世阿弥作とも

ワキ 渡守

ワキヅレ（男） 旅人

シテ 母（狂女）

子方 梅若丸亡靈

季は 地は 三月 武藏

「是は武藏の国隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと存じ候。又此在所にさる子細有つて。大念仏を申す事の候ふ間。僧俗を嫌はず人数を集め候。其由皆々心得候へ。

男次第
「末も東の旅衣。くく。日も遙々の心かな。

詞
「かやうに候ふ者は。都の者にて候。我東に知る人の候ふ程に。彼者を尋ねて唯今まかり下り候。

道行
「雲霞。あと遠山に越えなして。くく。いく関々の

道すがら。国々過ぎて行く程に。こゝぞ名におふ

隅田川。渡りに早く着きにけり。くく。

詞
「急ぎ候ふ程に。是は早隅田川の渡りにて候。又あれを見れば舟が出で候。急ぎ乗らばやと存じ候。如何に船頭殿舟に乗らうずるにて候。

「中々の事めされ候へ。先々御出で候跡の。けしからず物騒に候ふは何事にて候ふぞ。

男
「さん候都より女物狂の下り候ふが。是非もなく面

白う狂ひ候ふを見候ふよ。

ワキ
「さやうに候はゞ。暫く舟をとゞめて。彼物狂を待

たうずるにて候ふ。

シテサシ

「實にや人の親の心は闇にあらねども。子を思ふ道に迷ふとは。今こそ思ひ白雪の。道行人に言づてゝ。行方を何と尋ぬらん。聞くや如何に。上の空なる風だにも。

地
「松に音する習ひあり。

シテ
「真葛が原の露の世に。

地
「身を恨みてや明け暮れん。

シテ
「是は都北白河に。年経て住める女なるが。思はざる外に独子を。人商人に誘はれて。行方を聞けば逢坂の。関の東の国遠き。東とかやに下りぬと。聞くより心乱れつゝ。そなたとばかり思子の。跡を尋ねて迷ふなり。

下歌地
「千里を行くも親心。子を忘れぬと聞く物を。

上歌

「もとよりも。契り仮なる一つ世の。く。其内

をだに添ひもせで。こゝやかしこに親と子の。四

鳥の別れ是なれや。尋ぬる心の果やらん。武藏の

国と。下総の中にある。隅田川にも着きにけり。

く。

シテ詞「なふく我をも舟に乗せて賜はり候へ。

ワキ詞「お事は何くより何方へ下る人ぞ。

シテ「是は都より人を尋ねて下る者にて候。

ワキ「都の人といひ狂人といひ。面白う狂うて見せ候へ。
狂はずは此舟には乗せまじいぞとよ。

シテ「うたてやな隅田川の渡守ならば。日も暮れぬ舟に
乗れとこそ承るべけれ。かたの如くも都の者を。
舟に乗るなと承るは。隅田川の渡守とも。覚えぬ
事な宣ひそよ。

ワキ詞「實にく都の人とて。名にし負ひたる優しさよ。

シテ「なふ其詞はこなたも耳に留るものを。彼業平も此

渡りにて。名にしおはゞ。いざ事問はん都鳥。我思ふ人は有りやなしやと。なふ舟人。あれに白き鳥の見たるは。都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ふぞ。

ワキ 「あれこそ沖の鷗候ふよ。

シテ 「うたてやな浦にては千鳥とも云へ鷗とも云へ。など此隅田川にて白き鳥をば。都鳥とは答へ給はぬ。

ワキ 「實にく誤り申したり。名所には住めども心なく

て。都鳥とは答へ申さで。

シテ 「沖の鷗と夕波の。

ワキ 「昔にかへる業平も。

シテ 「有りや無しやと事問ひしも。

ワキ 「都の人を思妻。

シテ 「わらはも東に思子の。ゆくへを問ふは同じ心の。

ワキ 「妻を忍び。

シテ 「子を尋ぬるも。

ワキ 「思ひは同じ。

シテ 「恋路なれば。

地 「我も又。いざ事とはん都鳥。く。我思子は東路に。有りやなしやと問へどもく。答へぬはうたて都鳥。鄙の鳥とやいひてまし。實にや舟ぎほふ。

堀江の川のみなぎはに。来居つゝ鳴くは都鳥。それは難波江これは又。隅田川の東まで。思へば限りなく。遠くも来ぬる物かな。さりとては渡守。

舟こぞりて狭くとも。乗せさせ給へ渡守。さりとては乗せてたび給へ。

ワキ詞 「かゝるやさしき狂女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ。此渡りは大事の渡りにて候。かまひて静に召され候へ。

男詞 「なふあの向ひの柳の本に。人の多く集まりて候ふは何事にて候ふぞ。

ワキ詞 「さん候ふあれば大念仏にて候。それにつきてあは

れなる物語の候。此舟の向ひへ着き候はん程に語つて聞かせ申さうするにて候。さても去年三月十五日。しかも今日に相当つて候。人商人の都より。年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひとつて奥へ下り候ふが。此幼き者。いまだ習はぬ旅の疲れにや。以ての外に違例し。今は一足も引かれずとて。此河岸にひれふし候ふを。なんぼう世には情なき者の候ふぞ。此幼き者をば其まゝ路次に捨てゝ。商人は奥へ下つて候。さる間此辺の人々。此幼き者の姿を見候ふに。よし有りげに見え候ふ程に。さまざまに痛はりて候へども。前世の事にてもや候ひけん。たんだ弱りに弱り。既に末期と見えし時。お事はいづく如何なる人ぞと。父の名字をも国をも尋ねて候へば。我は都北白河に。吉田の何某と申しゝ人の唯ひとり子にて候ふが。父には後れ母ばかりに添ひ参らせ候ひしを。人商人

にかどはされて。かやうになり行き候。都の人の足手影もなつかしう候へば。此道の辺りに築き籠めて。しるしに柳を植ゑて賜はれとおとなしやかに申し。念仏四五返称へ遂に事終つて候。なんぼうあはれなる物語にて候ふぞ。見申せば船中にも少々都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念仏を御申し候ひて御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が着いて候。とうく御上り候へ。

「如何さま今日は此所に逗留仕り候ひて。逆縁ながら念佛を申さうするにて候。

ワキ 「如何に是なる狂女。何とて舟よりは下りぬぞ急いで上り候へ。あらやさしや。今の物語を聞き候ひて落涙し候ふよ。なふ急いで舟より上り候へ。

シテ 「なふ舟人。今の物語は一つの事にて候ふぞ。

ワキ 「去年三月今日の事にて候。

シテ 「さて其児の年は。

ワキ 「十二歳。

シテ 「主の名は。

ワキ 「梅若丸。

シテ 「父の名字は。

ワキ 「吉田の何某。

シテ 「さて其後は親とても尋ねねず。

ワキ 「親類とても尋ねこず。

シテ 「まして母とても尋ねぬよなふ。

ワキ 「思ひもよらぬ事。

シテ 「なふ親類とても親とても。尋ねぬこそ理なれ。其幼き者こそ。此物狂が尋ねる子にては候へとよ。なふ是は夢かやあらあさましや候。

ワキ詞 「言語道断の事にて候ふ物かな。今までによその事とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞやあら痛はしや候。かの人の墓所を見せ申し候ふべし。こなたへ御出で候へ。

「今までさりとも逢はんを頼みにこそ。知らぬ東に下りたるに。今は此世になき跡の。しるしばかりを見る事よ。さても無慙や死の縁とて。生所を去つて東のはての。道の辺りの土となりて。春の草のみ生ひ茂りたる。此下にこそ有るらめや。

地「さりとては人々此土を。かへして今一度。此世の姿を。母に見せさせ給へや。

歌「残りても。かひ有るべきは空しくて。く。有る

はかひなきはゝきゞの。見えつ隠れつ面影の。定めなき世の習ひ。人間うれひの花盛。無常の嵐音添ひ。生死長夜の月の影。不定の雲おほへり。實に目の前の憂き世かな。く。

「今は何と御歎き候ひてもかひなき事。たゞ念佛を御申し候ひて。後世を御弔ひ候へ。

カル「既に月出で河風も。はや更け過ぐる夜念佛の。時節なればと面々に。鉦鼓を鳴らし勧むれば。

シテ「母は余りの悲しさに。念佛をさへ申さずして。唯
ひれふして泣き居たり。

ワキ「うたてやな余の人多くましますとも。母の弔ひ給
はんをこそ。亡者も喜び給ふべけれど。鉦鼓を母
に参らすれば。

シテ「我子の為と聞けばげに。此身も鳶鐘を取り上げて。

ワキ「歎きをとゞめ声澄むや。

シテ「月の夜念佛もろともに。

ワキ「心は西へと一筋に。

二人「南無や西方極楽世界。三十六万億。同号同名阿弥
陀仏。

地「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。
南無阿弥陀仏。

シテ「隅田河原の波風も。声立て添へて。

地「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

シテ「名にしおはゞ。都鳥も音を添へて。

地、子方
「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

シテ詞
「なふく 今の念佛の内に。正しく我子の声の聞え

候。此塚の内にて有りげに候ふよ。

ワキ詞

「我等もさやうに聞きて候。所詮此方の念佛をば止め候ふべし。母御一人御申し候へ。

シテ
「今一声こそ聞かまほしけれ。南無阿弥陀仏。

子
「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏と。

地
「声の内より。幻に見えければ。

シテ
「あれは我子か。

子
「母にてましますかと。

地
「互に手に手を取りかはせば。又消えくとなり行
けば。いよく思ひは増鏡。面影も幻も。見えつ
隠れつする程に。東雲の空もほのぐと。明け行
けば跡絶えて。我子と見えしは塚の上の。草茫茫
として唯。しるしばかりの浅茅が原と。なるこそ
あはれなりけれ。く。

底本 .. 国立国会図書館デジタルコレクション 『譜曲評釈 第九輯』 大和田建樹 著